

発達障害と本学における学習障害アンケート調査報告

DOL支援プロジェクト

共通教育部人文・社会科学系 渡辺 昭彦 村上 彰美

はじめに

2002 年文部科学省は「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する実態調査」と銘打った調査を行った。対象は小中学校に通う生徒である。そして 2012 年に「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」と名を変えた同様の調査が行われ、同年 12 月 5 日に結果の報告がなされた。留意点は 2012 年度の調査では発達障害という語が調査名に加わっていることである。

両年の結果を表 1 に示す。

表 1 知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示すと担任教師が回答した児童生徒の割合 ([1] より)

	2002 年	2012 年
学習面か行動面で著しい困難を示す	6.3%	6.5%
学習面で著しい困難を示す	4.5%	4.5%
行動面で著しい困難を示す	2.9%	3.36%
学習面と行動面で著しい困難を示す	1.2%	1.6%

発達障害とは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものを言う」(発達障害者支援法第二条第 1 項条文) と定義される。

一般には、

1. 学習障害 (LD:Learning Disability) : 知的・身体的に問題がないが、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなど学習面で困難をきたす障害。
2. 注意欠陥・多動性障害 (ADHD:Attention deficit hyperactivity disorder) : 不注意、多動、衝動性で学習、社会性などに困難をきたす障害。
3. 自閉症スペクトラム障害 (ASD:Autism Spectrum Disorder) : 社会性、コミュニケーション、想像力（こだわり）、過敏性などで主として行動面に困難をきたす障害（広汎性発達障害、アスペルガー症候群、高機能自閉症などが含まれる）。

の3つをいう（厳密には4として「その他の特異的障害」が含まれるが本稿では言及しない）。また名称についても2005年に施行された法文と現在広く使用されつつある2013年5月に発表されたアメリカ精神医学会の診断基準 DSM-5（精神疾患の診断・統計マニュアル）に基づく用語は若干異なっている（本稿ではDSM-5に従う[2]）。

文部科学省の調査結果を症状別にまとめると表2のようになる。

表2 知的発達に遅れはないものの学習面、各行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合
([1] より)

	2002年	2012年
A：学習面で著しい困難を示す	4.5%	4.5%
B:「不注意」／「多動性一衝動性」の問題を著しく示す	2.5%	3.1%
C:「対人関係やこだわり感」で問題を著しく示す	0.8%	1.1%

日本の人口をおよそ1億2500万人として表1の結果から類推すると人口の6.5%の820万人ほどの発達障害者がいることになる。実際の発達障害者の実数は障害によって小学校、中学校と進学するにつれて変化するものがある。

図1は2012年度の調査結果のうち、小学1年生から中学3年生までの3大発達障害者数の学年別割合を表している（上野2013[3]）。

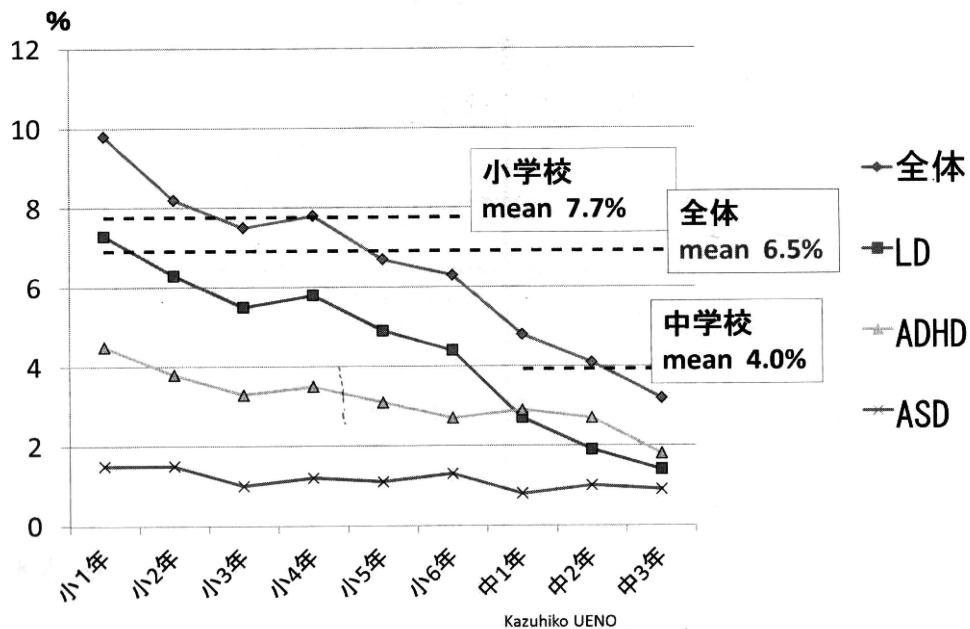
- 一見学齢が進むにつれてLDやADHDは減少傾向がうかがわれるものの、上野は、
- ・低学年ほど学習や行動の問題が表面化しやすい
 - ・現行の支援システムは小学生レベルの言語障害などを中心としたシステムであり、中学校では支援の利用経験が少ない
 - ・高学年ほど問題が錯綜し、二次的症状が重複する
 - ・年齢の進行とともに社会性の学習が進みそれなりの適応幅が広がり表面的現象が出にくくなるなどの理由で困難自体が解消してゆくという解釈はしにくいと述べている（[3]）。

それでは、高等学校、大学と進学するに従い、こうした発達障害の生徒・学生は本当に減少するのだろうか。文部科学省の調査結果を見ても小中学校では2012年度の方が増加傾向にあることがうかがえる。これに対しての手立てがとられているのは中学生以下の教育機関である。残念なことに現時点では、高等学校段階の発達障害者に対する調査・対策は不十分である。一方大学においてこの問題の対処に積極的に取りかかっているところが散見されるようになってきた[7][8][9]。

本学においても2012年度から「学習に困難を抱える学生を支援するプロジェクト（DOLプロジェクト）」が発足し進行してきている[10]。

図1 小学1年～中学3年までの学年別障害別百分率（上野 2013より [3]）

学年別(障害種別)



13

本学のDOL支援プロジェクトは、学内で学習や研究に困難をきたしている学生の抽出とそのサポートを目的としている。まず学生の発達障害の実態をアンケート調査を行うことで把握することとし、次の3つのアンケート調査を構成した。

1. 教員アンケート：指導教員による「困った学生」の抽出。
2. 学生アンケート：本学学生の自己認識による「学習困難度」の測定。
3. 保護者アンケート：保護者の我が子に対する認識の把握。

本稿では、2013年度から2014年度にかけて実施された1および2の結果の報告と考察を行った。

方法

2013年12月から2014年にわたって、全学科教員に対してメール配信による「気になる学生について」のアンケートを実施した。また新入生に対して、入学ガイダンス時に質問紙法による「勉学に関するアンケート」を実施した。

1. 「教員アンケート」と「聴き取り調査」の結果

全学科教員にメール配信によるアンケート調査を行い、教員12人から34ケースの回答が得られた。その中で28ケースについて、さらなる聴き取り調査を行った。アンケート内容を資料1に示す。

表3に学科別人数とそのケースのその後の扱いをまとめた。結果的に、9ケースが継続的なフォローが必要と判断され、19ケースは当面心配がないため終結と判断された。

表4に学年別（大学院を含む）と男女別にケース数をまとめた。内訳をみると、男子学生が28ケース中26ケースと圧倒的に多い。

聴き取り調査はアンケート回収後にアンケートを記入して下さった教員と直接面接して話を伺った。学科によっては、1年生入学当初から、気になる学生をピックアップし担当教員が学習面をサポートしたり、声かけを積極的に行いながら、継続的に見守っているという実情も知ることができた。大半のケースにおいては、研究室に配属が決まってからの個別指導で学生の実態が見えてくることが多く、学部4年生、修士1年生の多いことが特徴的である。

ケース内容として相談が多かったものを以下に示す。

- ① 発達障害なのか、そうでないのか判断が難しい。また、対応方法を知りたい。
- ② 授業に出てこない。連絡がつきにくい。対人関係が苦手なタイプへの対応。
- ③ 注意しても効果がない。その場では理解できても時間が経つと忘れていたり、解釈が間違っている。
- ④ 実験手順やルールが理解できない。
- ⑤ 学習のフォローが必要で学科で支援している。卒研・修論・就職が心配。
- ⑥ 常識的には理解できない行動や突飛な行動に対しての対応策を知りたい。

継続ケースについては、メールや電話での情報交換、研究室へ赴いてのカウンセリング、メール相談を継続している。また、当該学生との面談が必要なケースは並行して面接を行っている。

(表3) 教員聴き取りケース 学科別 内訳

キャンパス	学科	回答数	継続ケース数	終結ケース数
世田谷	原子力安全	9	2	7
	機械工	3	1	2
	情報通信	3	2	1
	建築	7	2	5
	都市工	3		3
	生体医	1		1
	共通教育	1	1	
横浜	社会デイア	1	1	
合計		28	9	19

(表4) 教員聞き取りケース 学生の学年と男女別内訳

	1年	2年	3年	4年	M1	M2
男	2	7	3	8	4	2
女	0	2	0	0	0	0
計	2	9	3	8	4	2

考察 ～困惑している教員たち～

聞き取り調査をしてみると、すでに気になる学生に対して 試行錯誤しながらサポートに取り組んでいる多数の教員の姿が見えてきた。独自に発達に関する専門書を読んだり、対応策を学科全体で検討している先生方の温かさと熱意には深く頭の下がる思いがした。

それでも、指導する側の精神的な負担はとても大きい。つい「何度言ったらわかるんだ！」と叱りつけてしまうこともあるだろう。自分自身への苛立ちや不全感にさいなまれる教員の声も多く、聞き取り調査の面接には、毎回1ケース1時間以上を要する。それだけ指導しながらの迷いや苦しみがいかに大きいかがわかる。その負担ができるだけ共有し、教員をサポートしていくことが、学生のサポートにもつながっていくと思われる。

また、学生支援センター・キャリア支援センターとも連携をとり、進級・卒業・就職の段階でできるだけつまずかないように見守っていけるよう、学内全体で気になる学生を支援していく体制が、早急に必要となってきている。

東京都市大学 学習に困難を抱える学生を支援する
DOL支援プロジェクト

DOL課用紙のダウンロードはこちら
 相談用紙(学生用) PDFダウンロード
 相談用紙(教員用) PDFダウンロード

TOPページ DOLとは? DOL相談方法 アンケート結果 よくある質問 お問い合わせ

DOL支援プロジェクトとは?
DOLは、様々な理由で学習や研究に困難を感じている学生と
その対処に関する本学独自の総括的概念のことです。

こんな事で困っていませんか?

文字や文章を読むことが極端に苦手
話しかけたり流れを理解するのが難しい
文章や文書をうまく書けない
言わされたことを正しく理解することができない
簡単な計算ができない
計画を立てたりそれを修正することが難しい
気になることがあつたら、ご相談ください。
 相談用紙(学生用) PDFダウンロード
 相談用紙(教員用) PDFダウンロード

都市大 DOL 支援プロジェクトホームページ例 [10]

(資料1) 全学教員向け「学習・研究で気になる学生アンケート」

全学教員向け「学習・研究で気になる学生アンケート」

DOL支援プロジェクト

先生の授業などで、気になる学生はいませんか。DOL支援プロジェクトでは、学習・研究上の「気になる学生」についての調査を始めています。少しでも、気になる学生がおりましたら、次の要領でアウトラインを簡単にご記入いただきたく存じます。

<学生について>

学科		年次		性別	男・女
----	--	----	--	----	-----

<困っている場面> ○をつけてください

授業	ゼミ	実験	実習	卒研	就活	その他
----	----	----	----	----	----	-----

<お困りのことはどうなことですか。簡単にお書きください>

[Large empty rectangular box for writing responses.]

<先生の所属>

所属キャンパス			
所属学科		お名前	

2. 「勉学に関するアンケート」結果

学生アンケートは、設問1で大まかな発達障害に関する悩みがあったかを2段階評価で尋ね、悩みがあった者のみ設問2に進むように構成した。設問2は22問の学習障害(LD)に関する質問(読む、聞く、話す、書く、計算する、推論する)とその他の発達特性を特徴付ける「不注意」「集団不適応」に関する質問をランダムに配置し、4段階評価の回答形式とした。対象を2014年度全新入生として実施した。2014年度版アンケート用紙の内容を資料2に示す。

新入生に対して行ったこのアンケートは、設問1、2を通じて学習や研究、あるいは自分自身の発達特性について不安感を抱いている学生が60%以上に達した。この結果は文部科学省の調査結果6.5%を10倍も上回るものであり、設問や施行方法の妥当性に疑問をもたらした。

そこで、精査を高めるためにアンケートをより学習と研究に関しての困難さを追求するものに修正し、2014年6月 無作為に抽出した在学生(2年生以上) 65名に実施した。

65名を性別、キャンパス別にまとめると表5のようになる。なお性別無記入が2名あった。

(表5) アンケートを実施した在学生内訳

キャンパス	世田谷	横浜	等々力	合計
男	21	11	0	32
女	12	9	10	31
合計	33	20	10	63+2(?)

*アンケートは、DOL支援プロジェクトメンバーの教員の講義時間に実施した。

設問1の回答結果

アンケート設問1の回答結果を表6に示す。設問1の3問について、1つ以上あてはまる回答した学生は、全体の43%にあたる28名であった。小中高を通じて若しくはいずれかで学習に違和感を感じた割合としては高率と言えよう。

(表6) アンケート設問1 回答数 内訳

	実施数	回答数
男	32	17 (53%)
女	31	9 (29%)
無記名	2	2 (100%)
合計	65	28 (43%)

資料 2 設問 1

＜設問1＞ 小・中・高時代での勉学について以下の質間に答えてください。該当する場合には、□欄に○をつけてください。

- ② 小中高時代での、自分の学習方法や学習態度、話や文章の理解の仕方・意見の発表の仕方で、自分は友人と違うのではないかと違和感を感じたことがある。□
 - ③ 小中高時代での、自分の学習方法や学習態度、話や文章の理解の仕方・意見の発表の仕方で、友達や先生から違和感や違いを指摘されたことがある。□
 - ④ 小中高時代での、自分の学習方法や学習態度、話や文章の理解の仕方・意見の発表の仕方で、親御さんから違和感や違いを指摘されたことがある。□

設問 2

2. 上の三つの質問に一つでも〇があった場合は下の質問に進んでください。

○がなかった場合は、ここで終了して提出してください。

回答は、当てはまる項目に、○を付けてください。

f f : 強くある f : やや強くある
p : 少しある p p : ほとんどない

- ① 不注意な点が多く、順序立てて学習課題をやり遂げるのが苦手だ
 - ② 集団での学習に参加することが難しい
 - ③ 物忘れ、紛失物が多い
 - ④ 聞き間違いや聞きもらしがある
 - ⑤ 集団場面では指示を聞き取るのが難しい
 - ⑥ 話し合いの流れを理解するのが難しい
 - ⑦ 説明するとき、言葉につまつたりする
 - ⑧ 筋道の通った話や内容をわかりやすく伝えることが難しい
 - ⑨ 質問の途中で急に答えたり、話をさえぎったりすることがある
 - ⑩ 勝手読みや読み方をよく間違える
 - ⑪ 文中の語句や行を抜かしたり、繰り返し読んだりする
 - ⑫ 文章の要点を正しく読みとることが難しい
 - ⑬ 文字を正しく書くのが苦手（読みにくい字、独特の筆順）
 - ⑭ 誤字脱字が多く、読みにくい文章を書く
 - ⑮ 自分の考えを文章にするのが苦手だ
 - ⑯ 簡単な計算や暗算にも時間がかかる
 - ⑰ いくつかの手続きを必要とする問題を解くのが難しい
 - ⑱ 文章題を解くのが難しい
 - ⑲ 事物の因果関係を理解することが難しい
 - ⑳ 行動計画を立てたり、それを修正することが難しい
 - ㉑ 早合点や、飛躍した考えをする
 - ㉒ 不注意な点が多く、順序立てて学習課題をやり遂げるのが苦手だ

設問2の回答結果

設問2は、設問1で1つ以上「あてはまる」と回答した場合に回答される。

回答方法は、f f（強くある） f（やや強くある） p（少しある） p p（ほとんどない）の4選択評価とし、順に4, 3, 2, 1と数値化して集計した。

回答結果から総サンプル数65名の約30%にあたる19名を「ハイリスク学生：特に強く勉学に困難さを感じている学生」として取り上げた（うち1名は無記名で成績資料との対象が出来ないため除外し、18名の分析を行った）。

設問2の得点は、全てに「強くあてはまる」と回答した場合88点満点となる。最高点は74点で最低点は0点であった。また、得点平均点は 総サンプル平均点 17.861点に対し 「ハイリスク学生」の平均点は51.16点で 勉学に対する困難さを強く感じていることがわかる（表7）。

（表7） 「ハイリスク学生」18名の設問2における内訳

得点	人数（人）
80点以上	0
70～79点	2
60～69点	1
50～59点	7
40～49点	4
30～39点	4
平均 51.16点	18

設問2において、回答率の高かった質問項目は、「不注意・忘れ物」などADHD（注意欠如多動性障害）該当項目が13/18人（72%）で最も多く、次に「話す」「読む」のLD（学習障害）該当項目が同数で各々11/18人となった。また、「集団での緊張感・不適応感」については1名（5%）で最も少なかった。

成績との関連性

「ハイリスク学生」18名の成績との関連性を検討するためGPA得点と比較したところ、2.0点以下の学生が14/18人（77%）であることがわかった。

（表8）成績資料GPA（秀4・優3点・良2点・可1点）との関連

	人数（人）
3.0以上	2
2.5以上3.0未満	2
2.0以上2.5未満	9
1.9以下	5

考察～気づかれにくい学生たち～

1. アンケート実施後、DOL 支援プロジェクトメンバーの教員から情報収集したところ、「ハイリスク学生」の中には、体育などの活動的な授業では積極的に参加し、対人関係などに問題は無く好印象な学生が複数いることがわかった。彼らは、講義形式の授業や、実験・論文などいろいろな困難を感じている可能性が考えられる。つまり LD(学習障害)の可能性が高い。
 2. 実施したアンケートは主観的なアンケートであるため、成績だけでなくより客観的な学生の情報が必要である。例えば、担任からの聞き取り、講義での様子、学科内での学生情報、クラブ活動などが挙げられる。また、学習における発達特性を知るためにスクリーニングテストの実施も必要である。現在日本では小中学生用に LDI-R という学習障害スクリーニング用のテストが販売されており、一部のハイリスク学生を対象に試行してみたが、有意な結果は得られなかった。現時点で大学生用の検査法は確立されていない。DOL 支援プロジェクトでは、既存の検査法 (LDI-R, ADI-R など) を応用して成人向けの検査法開発に取り組んでいる ([4], [11])。
 3. LD(学習障害) は、知能は正常範囲であるものの学習能力におけるばらつきが特徴である。そのため指導する側から見ると、その判断と対応が難しい。学生の苦しみが理解されずに、教員が一般の学生よりも厳しい指導や叱責を繰り返してしまう可能性が考えられ、現実に生じている。特に、ADHD (注意欠如多動性障害) の約 60% は LD(学習障害) を併発しているといわれているため、今回のアンケート結果で挙がった学生についてはより継続的に観察していく必要がある。
 4. 上記 3 のような学生については、「弱さ」を「強さ」でカバーしていくことが望ましいが、「弱い面のフォローの仕方や工夫」を知らず、「できない」ことへの不安を抱いていている学生が多い。こうした個別サポートが必要である学生については、担任との情報交換を密にし、支援する側と連携してサポートしてゆくことが必要であろう。
- また、このような学生の指導については、関わっている教員のストレスや困り感、負担感も斟酌して聞き取り調査を行い、教員もサポートしていく必要がある。

まとめ

発達障害のある学生の支援はシステムティックな記述が可能である。

第一段階はインプット情報の整理と分析である。すなわち実態の把握であり、教員、学生に対してアンケート調査を行ったことを指す。教員アンケートでは教員の対象とニーズを探り、状況に応じて事後面接でさらに情報を収集した。実際に学生に触れる最前線は指導教員であり、調査によって学生の把握状況が明らかになった。学生アンケートでは在学生における発達障害学生の検出とその程度、テストの妥当性の検証を試みた。検査項目の選択など今後の課題はあるもののある程度の検出力と妥当性、有効性を持ったアンケートを構築しうることが示された。今後行う予定の保護者アンケートでは、学生の自己認識と保護者の観点からの認識の差違を問うことになる。加えて客観的な外部指標(各種心理テスト)との整合性を検証する必要があるだろう。

第二段階は、第一段階で得たインプットの処理、すなわちサポートに当たる側の教職員に対するプロトコルを確立し、インプットに効率よく対応してゆくことである。この段階ではハラスマント問題が絡むことも多く、関係各方面との連携も大切である。こうしたガイドラインやマニュアルを策定・整備することが急務である。

第三段階は、障害を持つ学生を支援の元に卒業、進学、就業させ幸せな人生を歩んでもらうアウトプットを確立することである。そのためにはキャリア支援、ソーシャルスキル・トレーニングのみならず、ライフスキル（生きる術）の獲得を目指すことになろう〔5〕。

総括と対応

「LD は学習の問題、ADHD は行動の問題、高機能自閉症・アスペルガー症候群は社会性の問題と、単純にわりきれるものではない」〔5〕が、発達障害学生に対する教育機関の対応は、大多数が ASD および ADHD に対するものであり、成書も多い。また、従来 ASD と ADHD は別々の障害としてとらえられ、医師の診断においても併存は不可であった。DSM-5 では両者の併存が認められるようになり、より現実に即した疾病概念に変化しつつある〔6〕。

本学の DOL 概念はこうした点を考慮しつつ、大学という高等教育機関の役割も加味したメタ概念である。学生アンケートの項目にも LD に主眼を置きつつ、ASD、ADHD も検出できるように配慮した。まとめで述べた第二段階以降のアクションは現在 DOL 支援プロジェクトにおいて進行中である。

ガイドラインの策定は急務であるが、現在進行中である。ここで教職員への便宜を考慮して、LD への対処を列挙する。

LD のサポートの仕方

1. 聞く

個別指導する時間を作るなどして聞き取りやすい環境をつくる。

座席を前にする。

指示は「短く・はっきり・ゆっくり」話し、内容を確認しながら進める。

指示代名詞はできる限り使わない。

2. 話す

本人のペースを受け入れながら、否定しないでじっくりと聞く。

正しい言葉や文で話しかける。

あらかじめ、メモなどをとりポイントを整理して話すように助言する

発表時など、図や絵、写真などを用いて話しやすいように配慮する。

3. 読む・書く

講義時に、ワークシートやレーザーoltaを使用する。

文字を拡大する、振り仮名をふる、分かち書きにするなど視覚系の支援をする。

絵や図を用意して内容を整理する。

文章は単文、短文にしてキーワードをまとめ、内容理解がしやすいようにする。

ノートは罫線やマス目のあるものを使用し、PC やボイスレコーダの使用も考慮する。

ノートテイカーの利用（学生ボランティア、SA など）。

4. 空間認知（方向感覚、グラフ、地図の読み取り）

上下・左右・前後・遠近などの認知力の弱さをカバーする。目印をつける、言葉で順番に伝える、身体を使って方法の確認、など。

移動の際は友達と行動させる。

掲示、案内図、家具の配置などを考慮し、区別が付きやすいようにする。

* 従来の学習障害(LD:Learning Disabilities)は DSM-5 では限局性学習症(SLD:Specific Learning Disorder)と称される。また従来的呼び方においても医学的には「読み、書き、計算」の3つだが、教育的にはこれに「話す、推論する」を加味している。文部科学省による学習障害の定義は次の通りである。「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達の遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない」

結語

発達障害は、障害に悩まされるだけでなく、その障害に起因する二次障害に苦しむことが多い。二次障害とは発達障害と関連したストレス状況を背景として生じている情緒・行動・精神面の問題と定義される（日本 LD 学会 2011）。単に学習成績の低下のみならず、自己評価が低下したり、被害感情が生じたり、いじめを受けたりもしやすい。これまでの失敗経験に起因する自己不全感からの障害が見られる場合は、学習や行動のつまずき支援の前に、それらの改善が優先する場合もあることを忘れてはならない（[5]）。

発達障害自体は脳の器質的障害であり、治癒はしない。大学生になってからでは養育的配慮も困難であり、学習によって社会適応を図るのが最善である。そのために大学が出来ることは確立されたプロトコルによる対処と、二次的障害のケアと予防であることを忘れてならない。

障害の有無にかかわらず、手のかかる学生はいるものである。問題は専門家や支援センターに任せなければ良いというものではない。学生に関わる全ての人が関心を持ち、技量を磨いて、誠意を持って関わらなければならない。決して無関心ではいられない時代の潮流があるのである。

謝辞

本講をまとめるに当たって DOL 支援プロジェクトのメンバーの方々にアンケートの作成、データの

入力、考察、その他においてひとかたならぬお世話になりました。ここにメンバーの氏名を挙げて謝意を表したいと思います（敬称略、順不同）。

渡辺一郎、岩崎敬道、稲葉敏雄、山藤仁、千田茂博、久保哲也、中井洋史、信太洋行、大庭稔尚、住田暁弘、木村太郎、北村慶太郎、鈴木洋子。

参考文献

1. 竹内吉和 「発達障害を考える」 幻冬舎、 2014
2. 日本精神神経学会監修 「DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル」 医学書院、 2014、
(American Psychiatric Association Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth edition American Psychiatric Pub 2013)
3. 上野一彦 平成25年度 第6回発達障害の理解と支援に関する総合研修会 前期（1） 日本臨床心理士会発表、 2013.10 （東京）
4. 上野一彦、 篠 優子、 海津 亜希子 LDI-R -LD 判断のための調査票— 日本国文化科学社、 2008
5. 竹田契一、 花熊暁、 熊谷恵子 監修 「特別支援教育の理論と実践 第2版 II 指導」 金剛出版、 2012
6. 森則夫、 杉山登志郎 編 「DSM-5 対応 神経発達障害のすべて こころの科学」 日本評論社、 2014
7. 斎藤清二、 西村優紀美、 吉永崇史 「発達障害大学生支援への挑戦」 金剛出版、 2010
8. 福田真也 「大学生のアスペルガー症候群」 明石書店、 2010
9. 明治大学学生相談室 「アスペルガー症候群って知っていますか？ 発達障害の大学生支援ガイド」 明治大学学生相談室創立五〇周年記念事業 DVD 、 2011
10. 東京都市大学 DOL 支援プロジェクト ホームページ
<http://www.tcu.ac.jp/dol/index.html>
11. Ann Le Couteur, M.B.B.S., C.Lord and M.Rutter. 土屋賢治、 黒田美保、 稲田尚子(監修) ADI-R 日本語版、 金子書房、 2013